

# 源氏物語事典

待望の復刊!

源氏の読解に必要な基礎知識を整理・集成した大著! 池田亀鑑編 本書は源氏本文中の重要項目を注釈・解説し、その他に注釈書解題・諸本解題・所引詩歌仏典・作中人物解説・人物呼称一覧・年表・図録などを収録した基本図書。B5判 一一八八頁 定価二六二五〇円

# 源氏物語注釈書・享受史事典

伊井春樹編 平安末期から幕末までの注釈書五二五点の詳細な解題と享受の歴史を年月日順に克明に追う。編者四十年に及ぶ資料収集の集大成定価一八九〇〇円

# 動詞・形容詞・副詞の事典

森田良行著 三つの品詞について、語種・分類・文型・用法・特徴・類義語など語例や一覧表を掲載して具体的な例文も示しながら詳細に解説。定価二九八〇円

# CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

山田斐治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

# 老いの愉楽——「老人文学」の魅力——

尾形明子・長谷川啓編 「老い」をテーマにしてさまざまな角度から描かれた作品と作家を読み解く。「老い」の文学を愉しむガイドブックとして最適。定価二七三〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17  
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746  
http://www.tokyodoshuppan.com

# 木簡から探る和歌の起源

「難波津の歌」がうたわれ書かれた時代 犬飼隆 図対巻 1995円  
「難波津の歌」の歌の出自を探り和歌の起源に迫る。和歌木簡の歴史を愛するスリリングな一冊。

# 五十首引 僧歴綜覧

僧綱補任 推古世 一年—元暦 一年 藤田利徳 図対巻 AS世 5775円  
平安時代までの僧の全履歴が簡単にわかる。「僧綱補任」を僧名毎五十首順に再編成した至便の冊。

# 知られざる

# 王朝物語の発見

物語山脈を眺望する 神野藤昭夫 図対巻 2415円  
平安から南北朝期までの王朝物語の時代をダイナミックに捉える。

# 藤原為家研究

佐藤恒雄 AS世 28400円  
40年にわたり為家を追求してきた著者が、その人と歌字の全貌を明らかにした労作。綿密な年譜も収録。

# 徒然草論

稲田利徳 AS世 18900円  
徒然草の成立から享受までを考察した、著者渾身の徒然草研究集大成。

# 軍記物語原論

松尾葦江 AS世 8955円  
軍記とは何か、何が鎮魂を果たすのか。何が記憶を物語に変えるのか。

# お伽草子 百花繚乱

徳田和夫編 AS世 15350円  
内外の多彩な視点から「お伽草子」を解説。お伽草子ワールドがこの冊に凝縮。図版資料も多数収録。

# 伊勢物語

# 古注釈大成

第二巻 AS世 10290円  
片桐洋一・山本登朗責任編集  
『伊勢物語』の主要な古注釈を体系的に編集。翻刻した決定版。

# 田村泰次郎の戦争文学

中国山西省での従軍体験から尾西康充 AS世 28400円  
「田村泰次郎文庫」九千点のほか、小説舞台のフィールドワークと膨大な写真に裏打ちされた渾身の労作。

# 近代日中語彙

交流史 改訂新版 沈国威 AS世 5040円  
相互的な性質を持つ、日本と中国の異言語語彙交流の史実を探る。

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-3 電話03-3295-1331  
http://www.kasamashoin.jp/ ファクス03-3294-0996 (価格は税込)

# 国文学 12

# 特集 映画文学

国文学 解釈と教材の研究

平成二十年十一月十日発行(毎月) 同日発行 第五十三巻第十七号(二月)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五十三巻第十七号 二〇〇八年十二月号

# 国文学 12

日本語・日本文学・日本文化

解釈と教材の研究

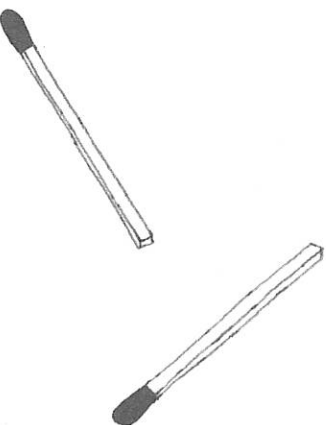
二〇〇八年 第五十三巻第十七号

# 特集 映画文学

映画が文学を求めるとき 田中真澄  
映画の見方、文学の読み方 重政隆文

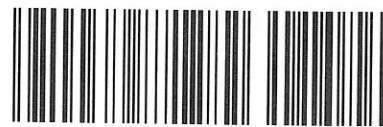
小特集 作家と映画

芥川龍之介 谷崎潤一郎 川端康成  
三島由紀夫 坂口安吾 梶井基次郎



学燈社

ISSN 0452-3016  
雑誌 03787-12



4910037871282  
01524

Printed in Japan

# 心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず  
本莊雅一

第十五回 玉菱鎮石考② 人と海と陸の萃点

なぜ氷上が切り札になるのか

崇神紀六十年条で、出雲の神宝を崇神天皇が収奪したのち、丹波国氷上の小児が、幼童とは思えぬ語りごとをした。

玉菱鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。押し羽振る、甘美御神、底寶御寶主。  
山河の水泳る御魂。静掛かる甘美御神、底寶御寶主。

氷上の氷香戸邊からの報告を受けた天皇は、これを神託とみて、あわてて、出雲の祭祀を復興させた。

大和朝廷と出雲との抗争、および出雲の服属を語ろうとするこの段のエピソードは、実はばらばらに存在して

大和—出雲抗争の膠着状況を転換させる重要な役割を、なぜ氷上が演ずることになるのかと言い換えてもよい。

出雲のリーダーである振根が斃されたあと、出雲で祭祀を行なわなくなったという筋書きは、実は大和政権にとつても深刻な影響をこうむるようなボイコットを、出雲が行なったということではあるまいか。何か適当なきっかけがあれば、出雲の「祭祀」復活に働きかけるチャンスがうかがっていたかもしれない。

氷上という地の何かが、状況転換を起こす靈威をもつものと、認識されていた。書紀編纂者、もしくはこの記事の採択者は、氷上に尋常でない威徳を認めざるを得なかった。でなければ、こんなに唐突に物語のクライマックスに登場し、快刀乱麻にことを解決する役割が与えられるはずがないであろう。

むしろ、たとえばわれわれにとつて「そろそろ黄門さまが印籠を出すぞ」と期待するのと同じくらいに、古人にとつてはここで氷上が登場するのは、特に説明がなくとも納得できるくらいに周知されている、切り札だったのではなかったか。

氷上とは一体どのような「場」なのであろうか。

いた民話を組み合わせて四段構成にしたものだろうと、前回推理してみた。だから、具体的な人名や地名が盛り込まれたひと続きの物語になってはいても、基本的には大和政権側の政治的意図を反映した編集になっていると、踏まえておく必要がある。

にもかかわらず、記紀全体を通して言えることだが、民間伝承をベースにしているからこそ、この国土に住まう人々の、決して自由に操作しきれない共同の心性や感性もまた、偽り難く表れていると思われるのである。

なぜこの託宣は、天皇自身が受けたものではなく、大和—出雲抗争とは直接関係のない地域の小児に下ったという話になるのだろう。特に崇神天皇は、記紀の中でも神託を受けやすいキャラクターとして描かれているだけに、ここでは降霊的からははずされたかっこうで、なおさら印象深いのである。

## 日本一低い中央分水界

山があれば、その山頂を境に水は複数の方向へと流れる。規模の大小を問わず、そうした地形の頂上や稜線はもちろん、家の屋根のつべんもいわば分水嶺である。

日本列島はそれ自体が馬の背のようになっていて、文字通り脊梁山脈が列島を縦断して水の流れを日本海側と太平洋側（瀬戸内海側）とに分流させている。そのように、列島の背骨たる分水嶺を、「中央分水界」という。



東経135度

日本の中央分水界

北海道から九州までの「中央分水界」ラインは、標高三〇〇〇メートル級の日本アルプスに代表されるような高い山脈で構成されているが、近畿地方以西では次第に山並みが低くなり、兵庫県に入ると、列島の背骨が一閃節抜けてしまったような平地も現れる。つまり、山と山との間の谷であり、そのようなところでも水の流れは分かれる。谷中分水界と呼ばれる。

そうした珍しい地形の中でも、標高わずか九五メートルにして、天水を日本海と瀬戸内海とに分流させる、「日本一低い中央分水界」をなすところ、それが氷上である。

兵庫県丹波市（旧氷上郡）氷上町は、東経百三十五度、日本標準時子午線が走る町としても知られている。史料上の初見は崇神紀六十年条の記事である。古事記では崇神天皇の三代前、孝靈天皇の段で、「針間の氷河」が、大和朝廷による吉備国（岡山県）方面への軍事的拠点として挙げられているのが参考になるか。

「針間」は播磨（兵庫県）であり、「氷河」は加古川の古名であろう。つまり「氷上」とは「氷河」の上流にある地の謂である。現在も氷上では、毎年夏に佐治川（加古川）で筏遊びをするイベントがもよおされるが、それを現地の人々は「氷の川いかだ下り大会」とよんで、お

だやかな川の流にゆられあそぶ。出雲の肥の河（斐伊川）でヤマトタケルと出雲皇師、出雲振根と飯入根とが川藻をともに見たり沐浴したりしたという伝承と同様、霊威の川の生命力盛んな時期にわが身も浸す（日足す、養す）、という意識伝承が生きているのである。

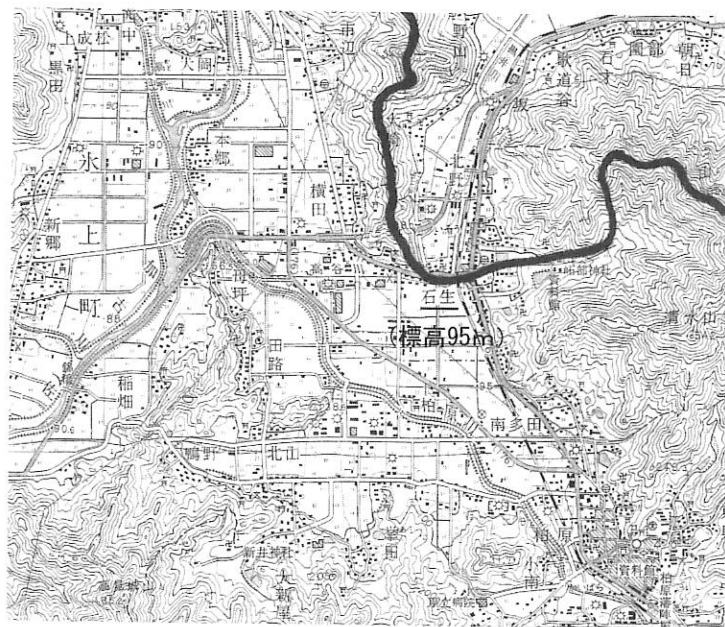
同町の石生地区が谷中（平地）の中央分水界であることは、人がそこに生活していれば特別な観測技術がなくとも経験的に、容易にわかることだ。現在は人家の建てこんだ市街地なので見通しはよくないが、この石生を境にして流れる二本の川が、一つは北側へ、一つは南側へ向かうという不思議な光景を、土地の者ならだれでも日常的に見ている。古い言葉では、「石生水分れ」と呼びならわす。

北の日本海側へは、黒井川水源から流れる水がほとんど竹田川にはいり、やがて由良川と合わさって若狭湾へと流れ込む。

南の瀬戸内海側へは高谷川水源があり佐治川へ。それがゆつたりと氷上の盆地を洗い、大小の支流を集めた加古川となり、瀬戸内海は播磨灘へと流れを伝える。

石生で南北に分れた川は、決してどこかで同じ方向に向かうようにはならないのである。

すなわち氷上の石生が、たいした起伏もない平坦地で



国土地理院「篠山」5万分の1図より  
（太線の部分が中央分水界）

あるにもかかわらず、国土の水流を南北に分ける境界領域であることは、だれの目にもあきらかである。この地が人々にとって、神秘の磁場でないはずがない。大雨が降れば、増水した川の水が田んぼの灌漑水路に浸入して、加古川と由良川の末端部分が手を結んだ格好になったかもしれないが、さもなければ両水系は決して交わることがない。

### 氷上は崇神紀の伝承に無関心

石生の地には、まさに「石生水分れ」を管理するかのよう、延喜式内社（延喜式巻第九・十の神名帳に記載されている神社のこと。延喜式は九六七年には施行されているから、少なくともそのころまでには存在していた神社だということになる）蛸部神社が、剣璽山（けんじさん）のもとに鎮座する。加古川へ通じる高谷川の水源であり、蛸部神社境内の背後から石清水がわいて、社殿周囲を洗うように流れている。

ところが、お参りして意外だったのは、「水分神」の「み」の字も出てこないことである。

祭神は磯部氏の祖神である奇日方命。『式内社調査報告』（皇学館大学出版部）所引の『蛸部神社志考』によると、和銅三（七一〇）年に創立とある。山城国（京都府）



峴部神社（水上市町石生）

の石清水八幡宮神領ともなり、近世期の宝暦二（一七五二）年からは、菅田別命、神功皇后、比賣大神を山城国の男山から勧請して合祀し、八幡宮と呼ばれるようになった。

幕末になって、水上の領主織田信親の揮毫による「峴部神社」の扁額が与えられ、峴部神社の社名が復古したらしい。

それにしてもこの位置なら当然、水分神を祭る神社であってよいはずだ。現に、今はこの峴部神社に隣接して「水分れ資料館」というずいぶん立派な施設がある。さらに高谷川の水を引いて滝や池を作った「水分れ公園」

関心を示さない。皆無といつてよい。

これまでの研究者たちが、「出雲神宝事件」と氷上地方とを関連付けて論じてこなかった理由の一端もわかる気がした。大和―出雲抗争に介入する氷上、という史料が、日本書紀以外にないのだから、古代史の組上へのせが論ずべき対象とはならなかったのだろう。

だが、日本書紀編纂者たちにとって、大和建国、王化政策の完成にあたって最大の課題であった出雲との折衝に、氷上が決定打をもたらしたという結末にすべき場合が、この地にあったのは間違いない。またそうしなければ納得されない一般の人々の共同心意もあったのではなかったか。

一体、古人たちは氷上に何を感じていたのだろう。

## 千年の齋国

記紀（七二二、七二〇年成立）よりも下って延喜式（九六七年施行）以降の資料によるが、氷上は天皇の即位儀礼、すなわち大嘗祭でも重要な役割を果たしている。

左大臣藤原頼長（一一二〇～五六）の日記（『台記』）に、近衛天皇（一一三九～五五）の大嘗祭（康治元年（一一四二）十一月一日）で、大中臣清親が唱えた祝詞

まであって、住民や観光者の憩いの場となっている。外へ向けてあまり大きな宣伝をしている様子はないが、こうした施設にはずいぶんとお金とてまひまをかけた、立派なものができていると思えた。

それだけに、水分信仰の資料がまったく出てこないのが、かえってわざとのように不思議であった。もう一つ不思議に思うことがあった。

現地図書館で郷土史も調べてみたが、当然、崇神紀六十年条の氷上小児の託宣記事に関する地元資料が手に入るだろうと思っていた。氷上の地の神秘感や、大和朝廷との関係、氷上からの影響力、出雲との交流など、あることないことを含め、たくさん読むことになるだろうと期待していたのだが、拍子抜けするほどにそうしたことがなかった。むしろ、日本書紀の記事をことさら無視し、郷土の歴史の一部とは認めないという意思すらあるのではないかと思わせるほど、崇神紀六十年条については一言も触れられないのである。

これはどうしたことか。

前回述べたように、大阪の美具久留御魂神社は水分社でもあるから、託宣内容の出雲とは別に、託宣が下ったとされる地、氷上の地相をも意識した可能性は高い。

ところが氷上現地の方は、小児の託宣物語には、全く

が取り上げられている（『岩波大系本「古事記 祝詞」所収』。それによると、「悠紀に近江の國の野洲、主基に丹波の國の氷上」とあり、氷上は主基國に齋定されていることがわかる。

悠紀・主基とは、大嘗祭に提供する神聖な稲を生産する「齋国（いわいのくに）」のことで、神意によって卜定される。それを二国に分けることでつけられた名称である。

悠紀は、一説によると元来「齋酒」の意で、神聖な酒を奉る地ということから、大嘗祭の神事に用いる新穀・酒料を奉るよう卜定された国郡のうちの第一のものをさすところ（『日本国語大辞典』小学館）。岩波文庫版『古語拾遺』の校注者西宮一民は、「キ」音の甲類乙類分析を経て、「ユキは『齋城』で『聖域』の意、スキは文字通り『次』で、『聖域の次位にある聖域』の意である」と述べる（一〇八頁）。

氷上はその、第二齋国の主基であったのだ。

しかも桜井治男によると、「卜定による」とは言うものの、第六十代醍醐天皇の寛平九（八九七）年以降、第一二代孝明天皇の嘉永元（一八四八）年までの間、約千年にわたり、いくどかの例外はありながら、ほとんど悠紀は近江（滋賀県）、主基は丹波（兵庫県の一部）

に固定されていたという（悠紀・主基の斎国と卜定）『別冊歴史読本絵解きシリーズ 古式に見る皇位継承「儀式」宝典』一九九〇年 新人物往来社所収）。すなわち、おそらくは丹波国の中でも氷上の地が、断続的に、とはいえ千年間にわたって、主基田を営み続けたのであろう。現在も氷上は古代の稲を受け継いで、赤米や黒米を生産し続けていることが、その証左となりえよう。

こう、推測する書き方しかできないのは、氷上町自身が、このことについてもなにも主張しないからである。なのでもしかすると地元住民も、ここが千年間、主基の国であったことなど忘れて、ただ神聖な穀霊の生れま土壌に感謝する心だけを、忘れずに伝えて暮らしているのかもしれない。

それにしても大嘗祭に供される新穀とはつまり、皇太子が天皇になるための、天皇霊をもたらす食べ物物なのである。三種の神器以上の神宝と言える。これほどまでに、氷上は朝廷から神聖視されてきた。

またそれを裏付けるような木簡資料も、平城宮造酒司跡から出土している。和銅年間（七〇八―一五）に氷上の「石負」が白米五斗を貢進したことを記したものの。要するに記紀が成立した八世紀初頭には、氷上郡「石負」郷の白米が、宮廷内の酒造に用いられたということ語

っているのである（『兵庫県の地名 日本歴史地名大系』平凡社）。

高谷川が造成するゆるやかな扇状地が、そのまま自然



古代米の稲田（氷上町石生）

堤防としての役割をも果たし、水の流れを南北に分かつ。おそらく古代人とてその程度の理屈はわかっていただろう。それでも、現代人でもやはり、この地には不思議な磁場を感じずにはいられない。

しかもそればかりでなく、大和―出雲抗争に、少なくとも日本書紀の中では終止符を打つ、政治的な役割をも与えられる。氷上のこうした重層的な性格付けは、いったい何に由来するのだろうか。

磯部に占拠された氷上

そもそも水分神が鎮座するはずの地に、岨部神社が少なくとも延喜式の時代以前から居座つていているということからして、いわくありげだ。これは何を意味するのだろうか。

弘仁五（八一四）年成立の『新撰姓氏録』にも、「大國主（大物主）命男久斯比賀多命」を祖神とする氏族として、「石邊公」が記されている。これを踏まえれば、奇日方命を祭神とする岨部神社もイソベ（石邊・石部・磯部）氏が創建したのと言える。

何を当たり前のことをと思われられるかもしれないが、問題はここからだ。

『神道大辞典』（臨川書店）に説明されているように、

磯部（石部）氏は太古からの大族で漁撈航海をなりわいとした海人集団である。

同書によると「海部の漁民は安曇氏の率いるところにして本邦西部に多く、此（磯部）は専ら本邦東部に活躍した」とある。本拠は伊勢国（三重県）で、古事記応神天皇の段に「此の御代に、海部、山部、山守部、伊勢部を定め賜ひき」とある「伊勢部」とは、磯部と団体であろうという。

首肯できるが、むしろ田中卓の「グイセ」の国名も「イソ」（磯）に由来するやうに思はれ」（『伊勢神宮の創祀と発展』国書刊行会 一三八頁）るという指摘の方が適切かと思われる。

というのも、『続日本紀』和銅四（七一一）年三月辛亥の条に「伊勢国の人磯部祖父・高志の二人に、姓を渡相神主と賜ふ」（岩波新日本古典文学大系）と見えることから、伊勢神宮外宮の豊受大神宮の祀官度会氏が磯部系から出ているとわかるが、それはつまり大和朝廷内部の人事によってではなく、志摩地方に土着の「磯辺」の民から祭祀のリーダーを選んで管理させるということであり、そうせざるをえないほど、すでに海人族「磯辺」の、自治体としての機構が整ってしまっていたということでもあるからだ。